

東京大学学術俯瞰講義 2010年

東京大学大学院情報学環

橋元良明

2010.6.17/6.24

橋元良明

(情報学環社会情報学コース)のprofile

<専攻>

- コミュニケーション論
- 情報行動論
- 社会心理学
- 社会言語学

主な研究内容

- (1)コミュニケーションの了解過程／内容分析

語用論、言語心理学、認知心理学などの研究成果を取り込みながら、言語および非言語記号の伝達・了解メカニズム、メッセージ分析の方法論を理論的に研究

○『背理のコミュニケーションーアイロニー・メタファー・インプリカチャー』勁草書房

○『コミュニケーション学への招待』(編著)大修館書店

○共訳書『メッセージ分析の技法』勁草書房

- (2)情報環境の変化と認知能力の関連分析

情報環境の変化が、言語発達などのコミュニケーション関連の認知能力や言語行動などにどのような影響を及ぼすのかについて、理論・実証両面から分析。たとえば新しい映像メディアが乳幼児の脳発達に及ぼす影響、情報環境の変化が若年層の性格形成に及ぼす影響等の考察。

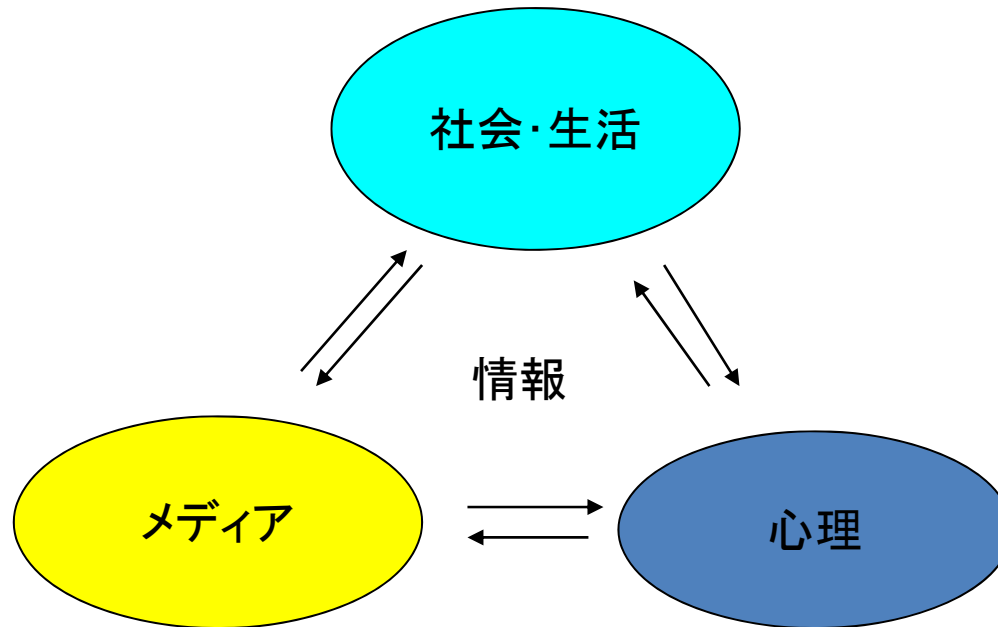
○「映像メディアと脳ーテレビ映像の脳生理学的アプローチ」、『マス・コミュニケーション研究』No.46

主な研究内容(2)

- (3)情報行動の社会心理学的分析
メディア利用行動や対面コミュニケーション行動などの「情報行動」が、情報環境の変容に伴って実際にどのように変化しつつあるのか、またその変化に関連する社会心理学的要因は何かを実証的に分析。
 - 『メディア・コミュニケーション論』(共編著)北樹出版
 - 『情報行動と社会心理』(編著)北樹出版
 - 『メディア・コミュニケーション学』(編著)大修館書店
 - 『ネオ・デジタルネイティブの誕生』(橋元良明+電通)ダイヤモンド社
- (4)語用論的方略の差異などに関する異文化コミュニケーション比較
コミュニケーション研究の知見を異文化交流状況に援用し、実証的調査をも交えて現実的課題への応用を試みる。
 - ビデオ『近くて遠い国？—日韓青少年コミュニケーションの今』(外務省からの委託)
 - ビデオ『広がれ つなげ 子どもの世界—新世代の日韓交流』(外務省からの委託)

一言で言えば「情報社会心理学」

コミュニケーション・ダイナミクス



2010年度学術俯瞰講義

: 橋元担当

“ネット・ユーザーの心理と行動”

- (1)6/17 インターネットとメディア・カニバリズム
- (2)6/24 メディア環境の変化と日本の若者のメンタリティー

(6/17) インターネットとメディア・カニバリズム

Cannibalism

ーデータで検証する日本人の情報行動の変化

～ネットはテレビを侵蝕しているか？

ベースの調査の概要

○「日本人の情報行動2009」

橋元&電通の共同研究

• 日記式調査＋質問票調査

調査地点 全国（157地点）

調査対象 男女13歳～69歳 N=1,490

住民基本台帳による層化二段**無作為**抽出

調査員による訪問留置法

調査時期 2009年6月

日記式～居場所（7項目）、生活行動（8項目）、

情報行動（29項目）を15分単位のセルに記入（10分未満もチェックさせ5分として計算）

29の情報行動項目

		平均値(分)
テレビ	テレビ放送を見る	187.8
	録画したテレビ番組を見る	9.8
	DVDソフト・レンタルDVDなどを見る	3.3
	テレビゲームをする	3.1
携帯電話(PHSも含む)	メールを読む・書く	18.2
	サイトを見る	7.2
	サイトに書き込む	1.4
	通話をする	8.4
	テレビ放送を見る	2.1
	録画したテレビ番組を見る	0.5
	ゲームをする	1.2
	インターネット経由の動画を見る	0.4
パソコン	メールを読む・書く	15.8
	サイトを見る	15.4
	サイトに書き込む	1.1
	チャット機能やメッセージャーを使う	1.9
	作業をする(Wordなどでの文書作成、Excelなどでの計算)	42.7
	テレビ放送を見る	1.9
	録画したテレビ番組を見る	0.6
	インターネット経由の動画を見る	2.7
	DVDソフト・レンタルDVDなどを見る	0.2
	ゲームをする	3.3
印刷物	新聞を読む	22.3
	マンガを読む	1.9
	雑誌(マンガを除く)を読む	3.4
	書籍(マンガ・雑誌を除く)を読む	8.9
機 他 器 そ の の	ラジオを聴く	30.0
	携帯型ゲーム機でゲームをする	2.4
	固定電話で通話する	7.9

日記式調査票

※「情報行動」について、
行動があった場合にはすべてご記入ください。

		6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
		6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	
		30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
テレビ	テレビ放送を見る		X	X										
	録画したテレビ番組を見る													
	DVDソフト・レンタルDVDなどを見る													
	テレビゲームをする													
携帯電話 (PHSも含む)	メールを読む・書く				X									
	サイトを見る													
	サイトに書き込む				X									
	通話をする													
	テレビ放送を見る													
	録画したテレビ番組を見る													
	ゲームをする													
情報行動 パソコン	インターネット経由の動画を見る													
	メールを読む・書く				X	X			X		X			
	サイトを見る								X					
	サイトに書き込む													
	チャット機能やメッセージャーを使う													
	作業をする (Wordなどの文書作成、Excelなどの計算)													
	テレビ放送を見る													
	録画したテレビ番組を見る													
	インターネット経由の動画を見る													
	DVDソフト・レンタルDVDなどを見る													
印刷物	ゲームをする													
	新聞を読む													
	マンガを読む													
	雑誌(マンガを除く)を読む													
その他	書籍(マンガ・雑誌を除く)を読む													
	ラジオを聴く													
	携帯型ゲーム機でゲームをする													
	固定電話で通話する													
		30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
		6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	
		6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00

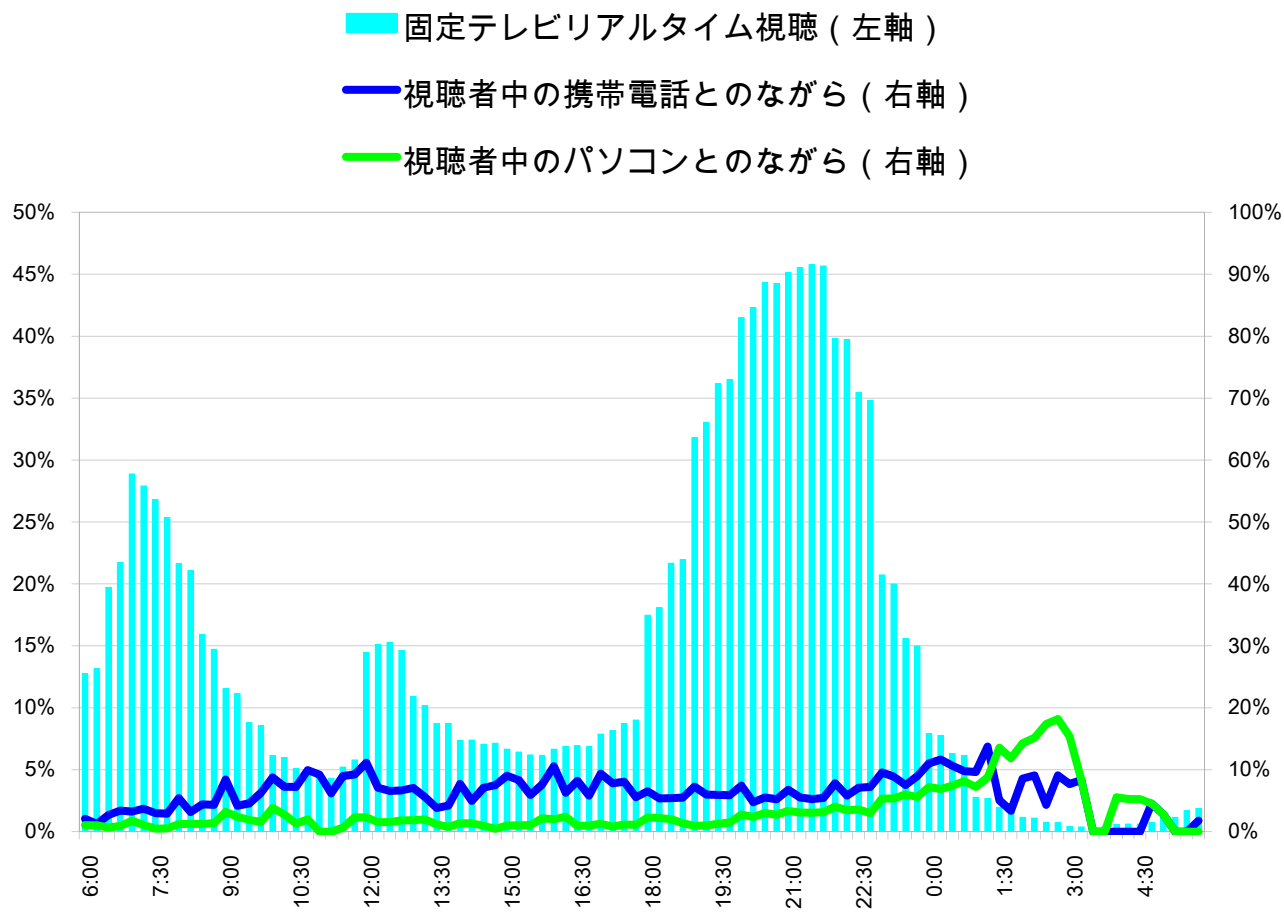
(10分未満を継続している場合です)

(10分未満の場合 X 印)

いっぺんに2つ以上のことをした
時は全部に印をつけてください

1-15
2-15

(結果の一例)テレビ視聴行為率の時刻別推移



平日ピークは21時台

その他の参照調査

○2005年日本人の情報行動調査(橋元研究室)

N=2,029 2005年3月実施、全国調査

対象=13-69歳

コンセプト、方法は2009年調査と同じ

○2008年 BPO青少年テレビ視聴実態調査

BPO(放送倫理番組向上機構)青少年委員会の活動の一環として橋元らが実施した。

2008年11月実施、N=311

東京在住16-24歳

※本報告後半の「BPO調査」とはこの調査

問題意識

- テレビ離れは本当か？
- テレビ視聴時間が減少しているとすれば、その主因はインターネットとのカニバリズムか？

「テレビ離れ？」の検証方法(1)

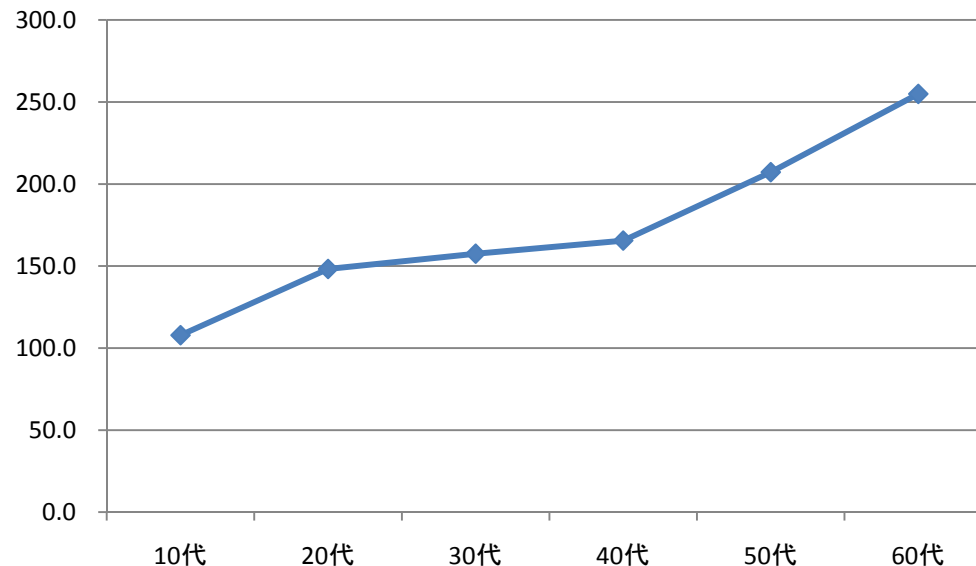
～年代別のテレビ視聴時間の比較

年層別にみれば、若年層の視聴時間が短い。

～このデータから「若者のテレビ離れが進んでいる」と言えるか？

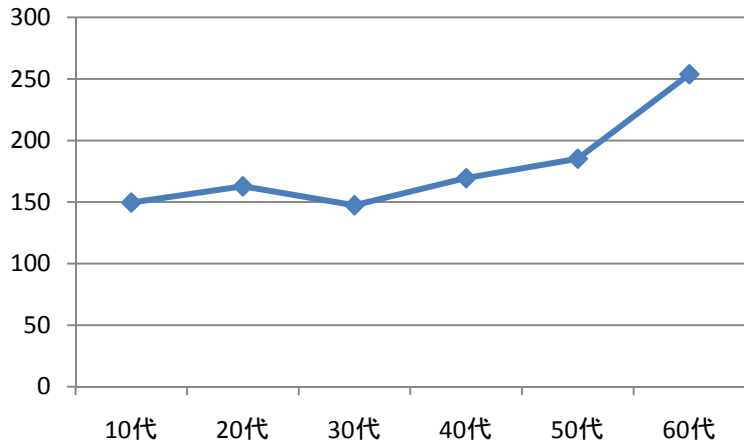
→No!

年代別テレビ視聴時間(分)2009年

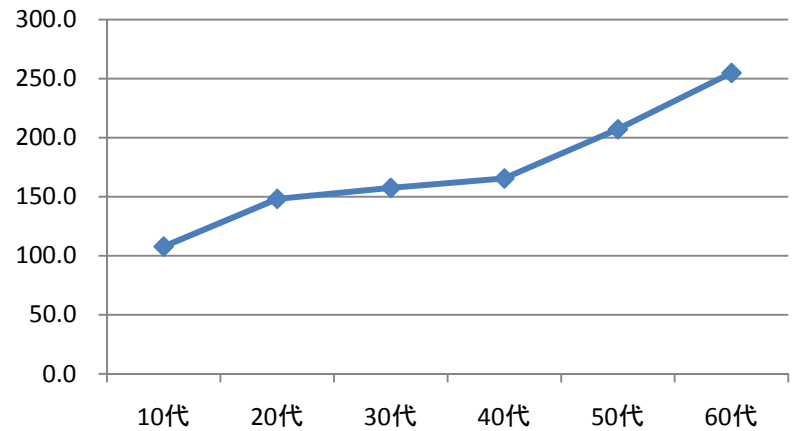


日本ではほぼ一貫してどの時代も若年層ほど
テレビ視聴時間が短い。 →年層効果

年代別テレビ視聴時間(分)
2005年



年代別テレビ視聴時間(分)
2009年



「年層効果」～年齢層の特色の反映

たとえば、「今の若者は……」といっても、自分が加齢することによって、自分自身が変化したにすぎず、いつの時代も若者が同じ傾向を示しているのなら、「年層効果」にすぎない

Cf.「時代効果」～時流の変化

「今の若者は変化した」といっても、全層で同じ方向・傾向の変化があれば、時代の流れであって、今の若者特有の変化ではない

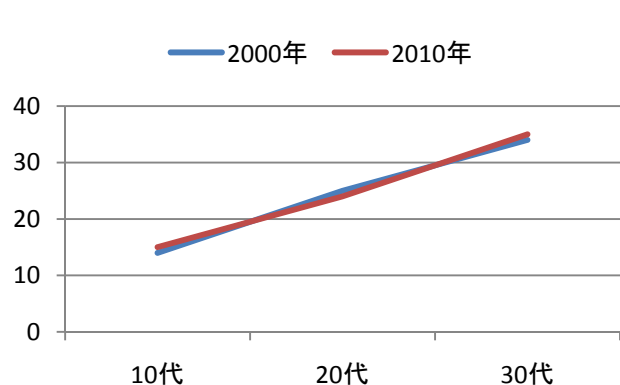
eg.「今の若者は米を食わない」といっても、日本の全層で米の消費量が減っているので、それは時代効果である。

※全層でN年経過後、テレビ視聴時間が減っていれば、「時代効果」として、テレビ視聴時間が減り続けることはありうる。

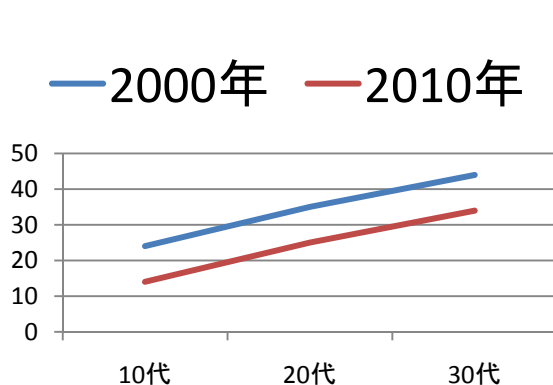
たとえば、「若者の行動・意識が変わってきた」というには、加齢の影響と時代要因を調整した特定世代の**コーホート(世代)分析**をした上で、そのコーホートの独自性を検証することが必要。

そのためには、最低限、一定期間(n年)をおいた2つの調査(T1,T2)を実施し、

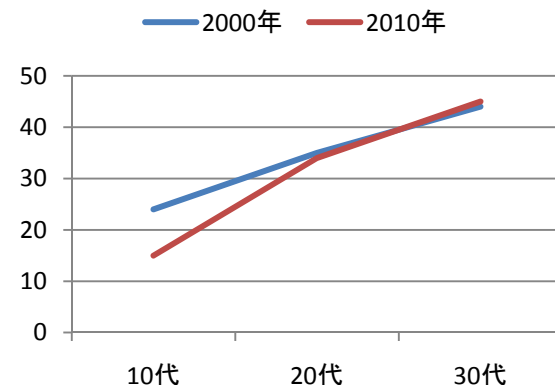
若い世代集団X以外の集団が、年層効果(あるいは時代効果)にしたがった変化をしているのに対し、Xだけが得意な結果であることを明らかにしなければならない。



年層効果

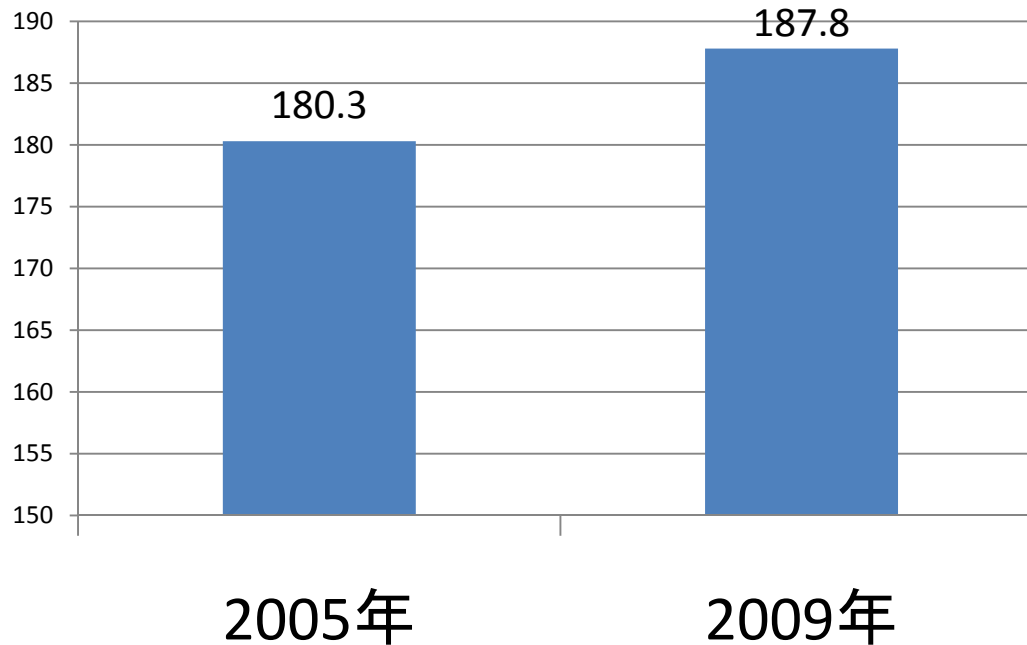


時代効果



新10代だけ変異

「テレビ離れ？」の検証の方法(2) ～継時的テレビ視聴時間の変化を見る



「日本人の情報行動調査」では、4年間で7.5分の増加
→実態はテレビ視聴時間は増えているのか？

→No!

増えているわけではない

①測定誤差 +-5分程度は誤差の範囲

②調査時期の変動要因

2005年、2009年の調査対象日（各2日間）にテレビ視聴時間を増減するような要因があった可能性（たとえば、ビッグニュース、イベント、天候）

※ただし、両年とも該当日にはとくに大きなイベント、ニュース等はなかった。

③平均年齢の推移

調査は「層化無作為抽出」で実際の人口比例に即して、年齢分布を実態に反映させて標本が抽出される。

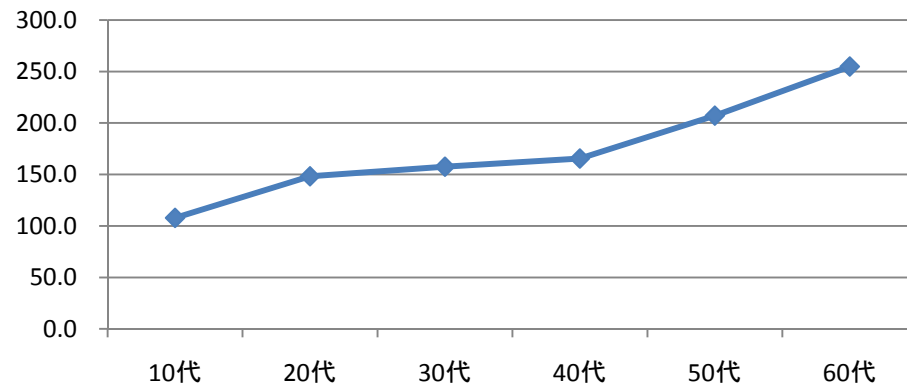
2005年→2009年、高齢化の進行

調査でも、13歳～69歳という枠の中で、

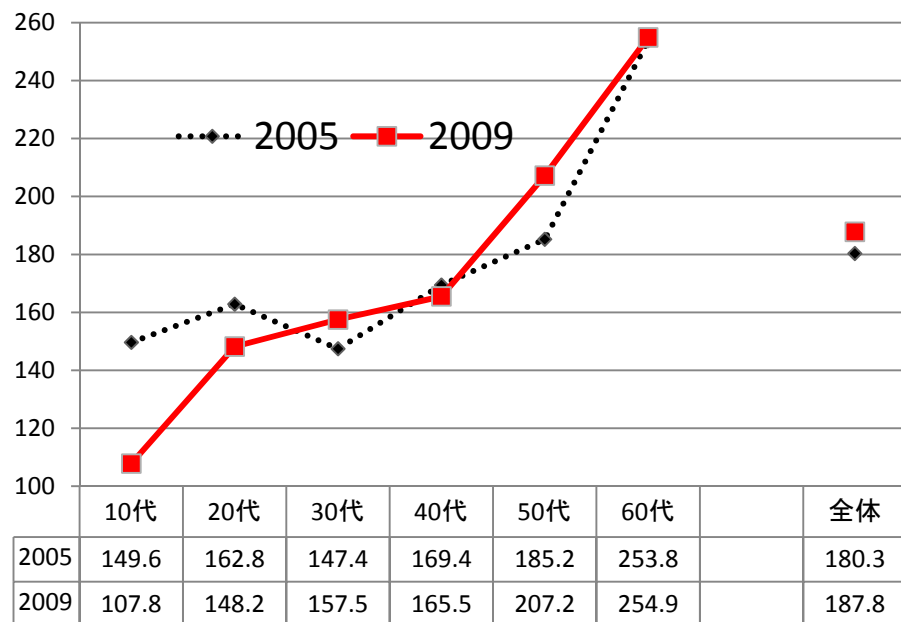
高齢化にあわせ、調査対象者の平均年齢が高齢化してる(42.8歳→45.2歳)

一方で高齢者ほど、テレビ視聴時間が長い、という事実
→13-69歳という調査対象者年齢が同じでも、
平均時間が長くなる

年代別テレビ視聴時間(分)2009年
(再掲)



で、再び「テレビ視聴時間は減少しつつあるのか？」



30代以上では、4年の推移によらず、同年齢層でほぼ同じ視聴時間
若年層、10代でとくに大きな減少(-41.8分)

→年層効果や時代効果ではなく、実態として若年層で視聴時間が減少している可能性

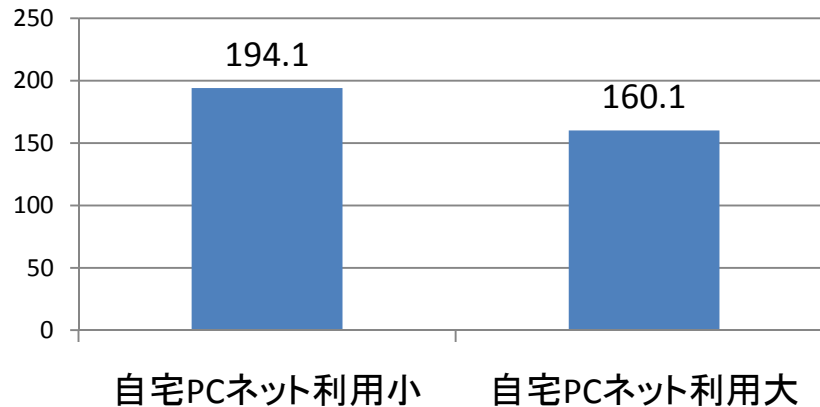
問題意識2 ネットがテレビを侵蝕しているのか？

○テレビ視聴時間とネット利用時間の相関をみる。

テレビと自宅PCネット利用時間の相関

= **-0.04** (有意水準に達していないが**負の相関**)

自宅PCネットの利用時間別にみれば



※自宅PCネット利用時間の全体平均値16.6分未満と以上で分類

～ネット利用時間の長い人ほど、テレビ視聴時間が短い。
→ネットがテレビを喰っていると言えるのか？

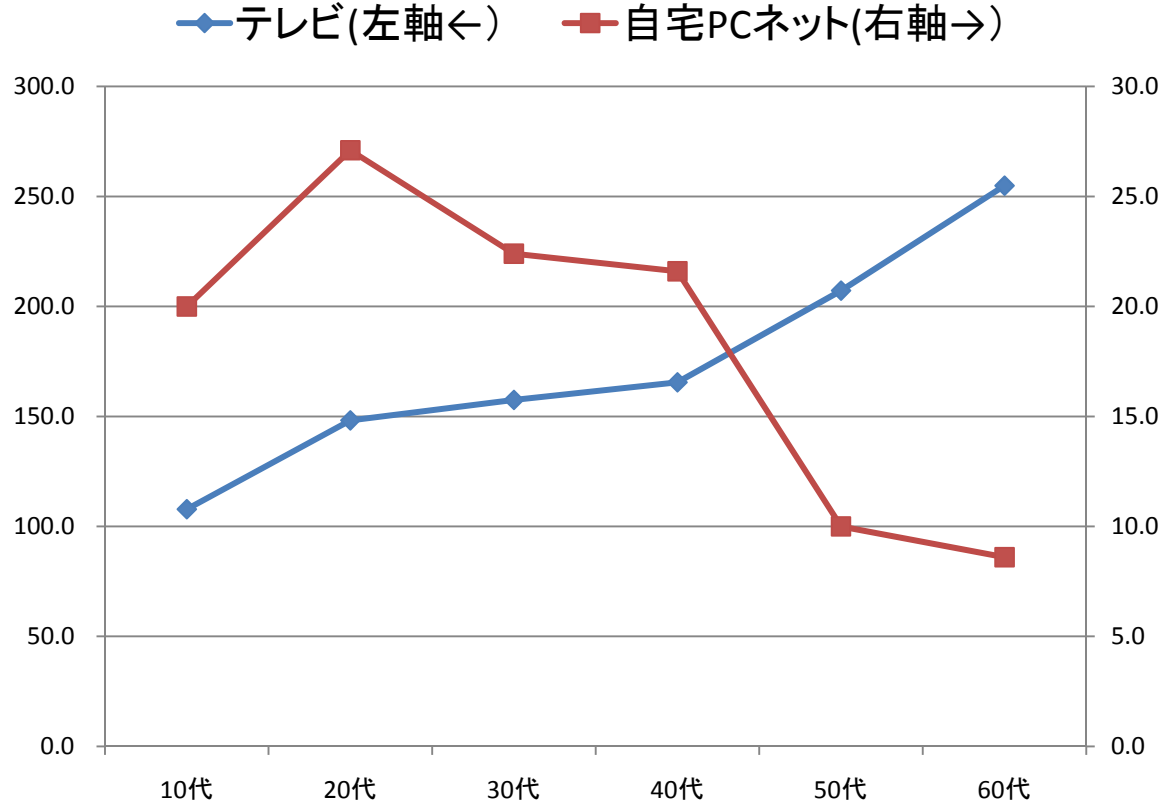
→**No!**

たとえば、「ネット利用時間の長い人ほど、テレビ視聴時間が短い」としても

→インターネット利用がテレビ視聴に直接影響を及ぼしたことを意味しない。

インターネット利用層と非利用層とは、デモグラフィック属性がかなり異なり(一般的にインターネット利用層ほど若年層で高学歴等)、テレビ視聴時間に関してもその属性の影響が及ぶから。

年層別にみたPCネット利用時間とテレビ視聴時間



→「年齢」という要素を媒介とした負の擬似相関

Cf. 擬似相関とは？

架空の話であるが、男性の「ハゲ度」を測定し、
一方で50代までの年収を調査すると

「ハゲ度と年収は高い相関」(おそらく)

～「ハゲ度が高いほど、年収が高くなる」と言える
のか？ →No!

- ・ハゲ度と**年齢**は強い相関

- ・一方で、50代までだと、年収と**年齢**も正の相関

→「年齢」を介した「擬似相関」で、直接的にはハゲ度と年収には因果関係はない。

たとえば各種世論調査、支持政党調査などで「高学歴なほどA」という結果がしばしば示される。

しかし、これまでの日本では、時代が今に近づくほど、リニアに大学進学率が上昇してきた。

つまり、若年層ほど平均的に高学歴である。

したがって、「学歴とA」は「年齢」を介した擬似相関である場合も多い。

「テレビ視聴と青少年の攻撃的行動・犯罪率」
についても、

アメリカなどでは「テレビ視聴時間が長い青少年ほど、攻撃的、犯罪率が高い」という調査データがしばしば見られる。(だからTVは悪?)

しかし、アメリカでは、年収が低かったり、非白人系の家庭の子ほどテレビ視聴時間が長い傾向があり、一方で、そうした属性の子ほど家庭環境が劣悪で、攻撃的・犯罪率が高いという傾向がある。したがって、「家庭環境」を媒介とした擬似相関の疑いが高く、テレビ視聴自体が原因でない可能性

ネット利用とテレビ視聴時間のカニバリズの検証 時差マッチング法のコンセプト

- 調査が平日2日間実施されたことを利用し、自宅PCネットをいずれか1日だけ利用した人をピックアップし、その人において
 - a. 「PCネットを利用した日」と
 - b. 「PCネットを利用しなかった日」との自宅テレビ視聴時間を比較する。
→分析母数がまったく同一であるため、属性の影響を排除できる。

自宅での2日間のPC利用パターン

タイプ		N	%
1	自宅PCネット平日両日とも利用	246	16.5
2	自宅PCネット平日初日だけ利用	97	6.5
3	自宅PCネット平日2日目だけ利用	87	5.8
4	自宅PCネット平日両日とも非利用	1060	71.1
		1490	100.0

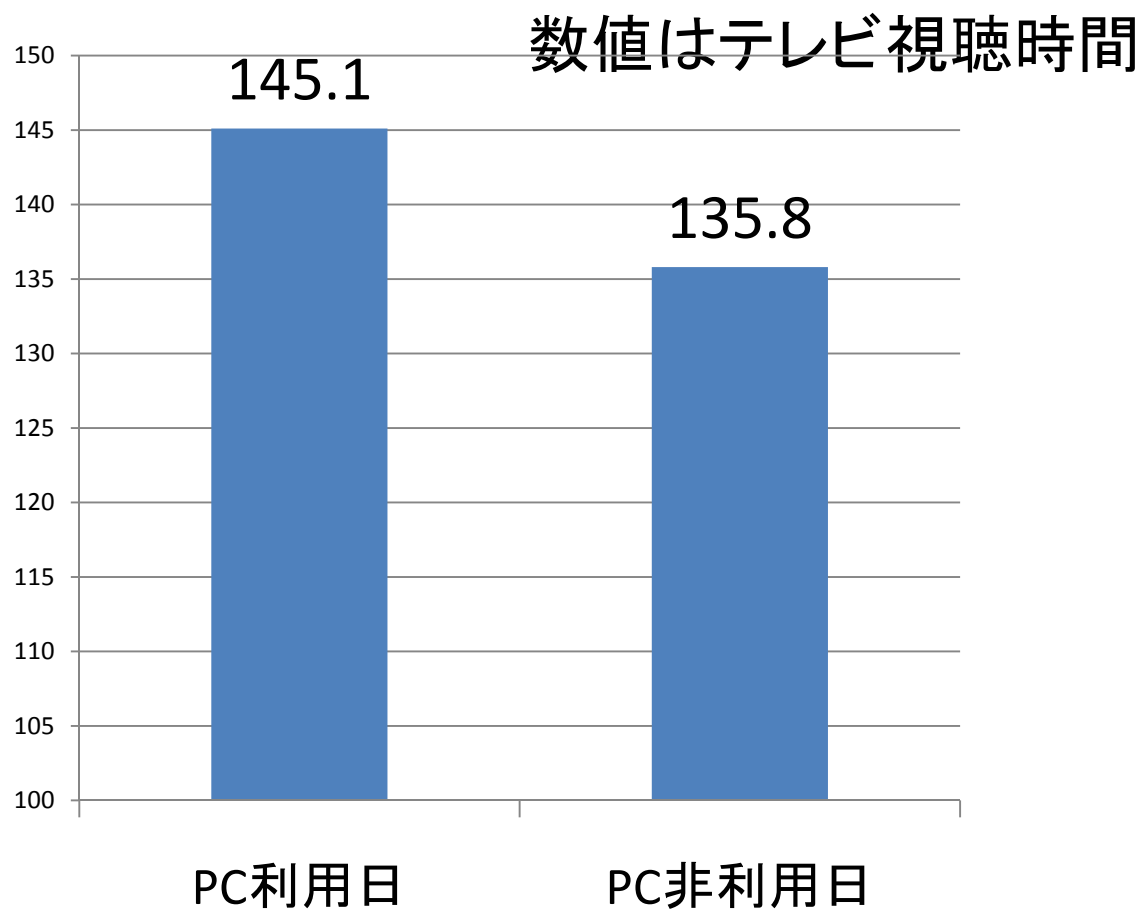
タイプ2と3の184名について、PCネットを利用した日としなかった日のテレビ視聴時間を比較

	テレビ視聴時間	N
PC利用日	145.1	184
PC非利用日	135.8	184

もしPCネットがテレビ視聴時間を奪う
のであれば。。。。

PCを使った日において、テレビ視聴時間が短く、
PCを使わなかった日において、テレビ視聴時間が
長い、
はず。。。

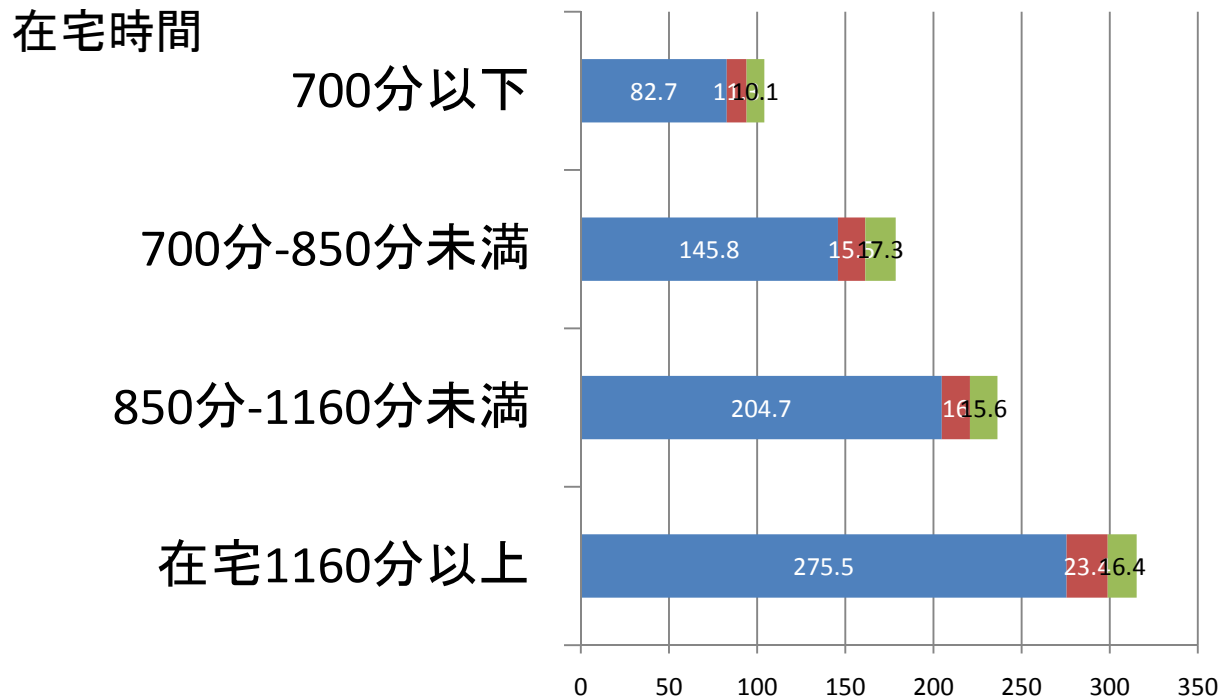
【結果】自宅でPCネットを利用した日の方がテレビ視聴時間が長い



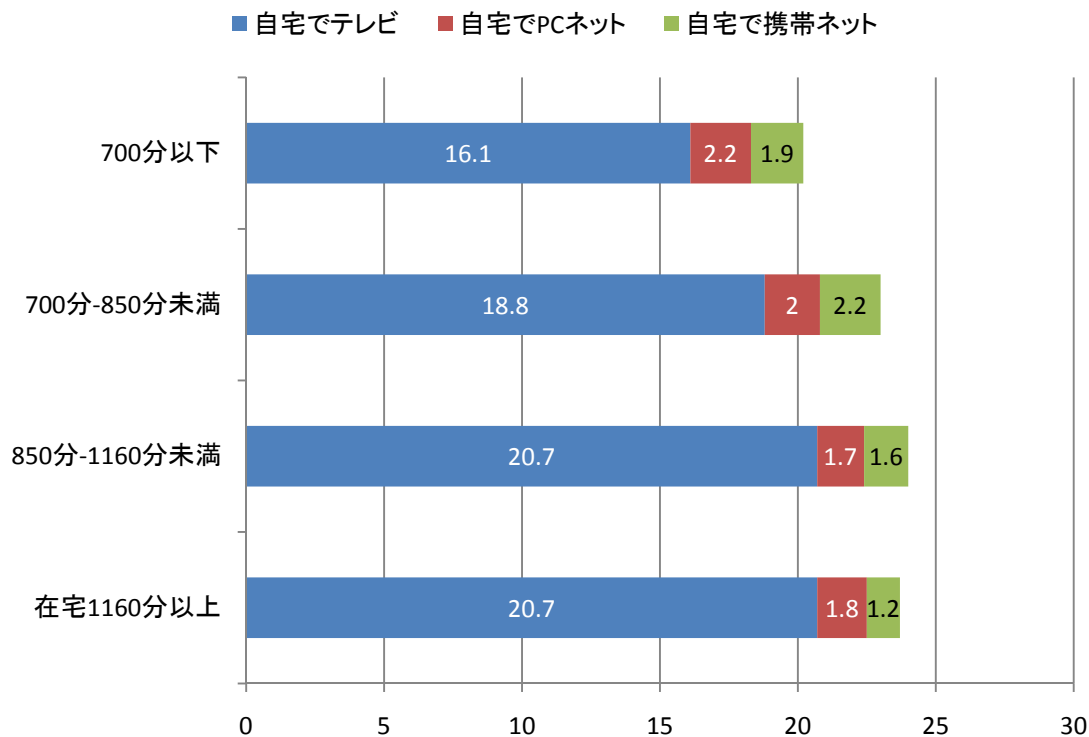
- 人は、在宅時間に応じて、ふだん利用しているメディアを使いわける。
- テレビ視聴や新聞閲読時間、パソコン利用等、メディア利用に関していえば、現状では、限られた在宅自由時間内で一方的に時間を奪うという構図は妥当せず、在宅自由時間に応じた配分でそれぞれの時間を伸縮させている。
- 明瞭な「カニバリズム」関係にはない。

在宅時間が長いと、「テレビ」「自宅PC」 のいずれも長くなる

- 自宅でテレビ
- 自宅でPCネット
- 自宅で携帯ネット

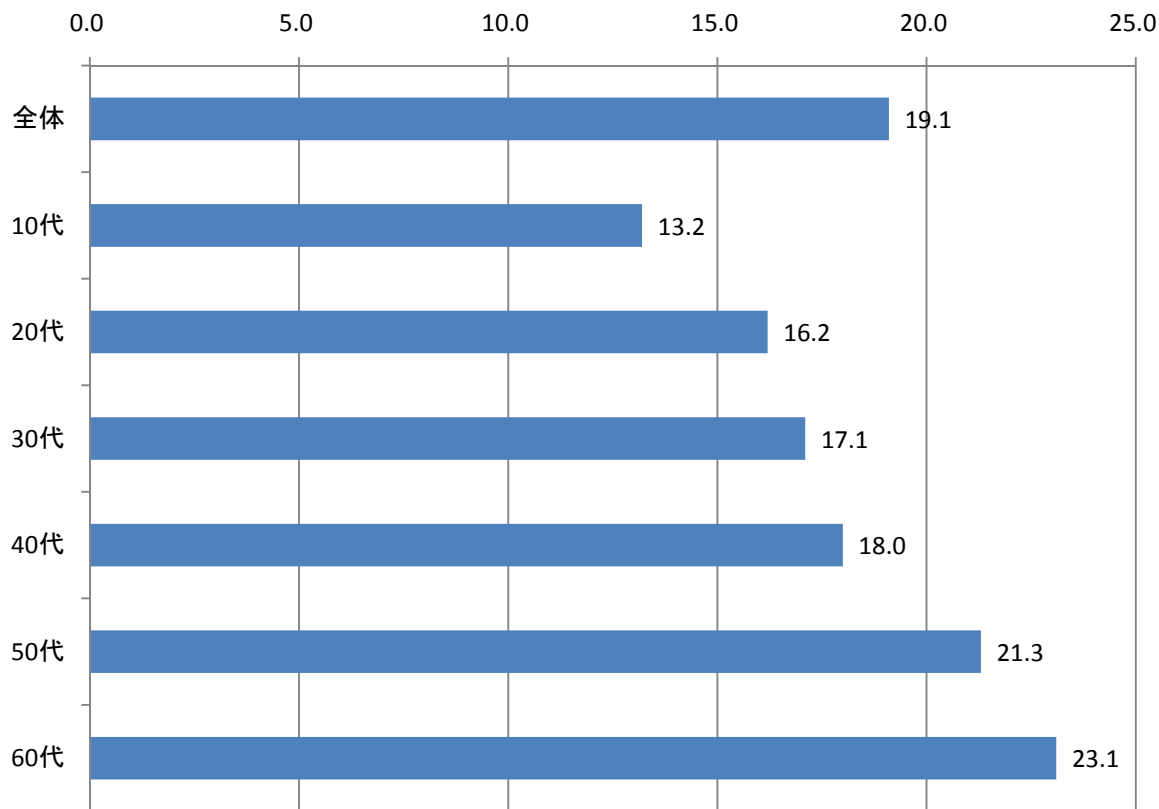


在宅時間に占めるテレビ視聴時間の比率は、ほぼ一定 (在宅時間が700分以上の人では約20%)



ちなみに『NHK国民生活時間調査』のデータを元にした橋元の再分析によれば、1970年から1995年にかけて、テレビ視聴時間は一貫して「在宅起床時間」の約40%₉₅

ただし、詳細にみれば、在宅時間に占める比率は年層によって差があり、若年層ほど、比率が下がる。
←他にやることがいっぱいある



相関分析でも、15-29才ではテレビと「PCネット」はカニバラず(無相関)

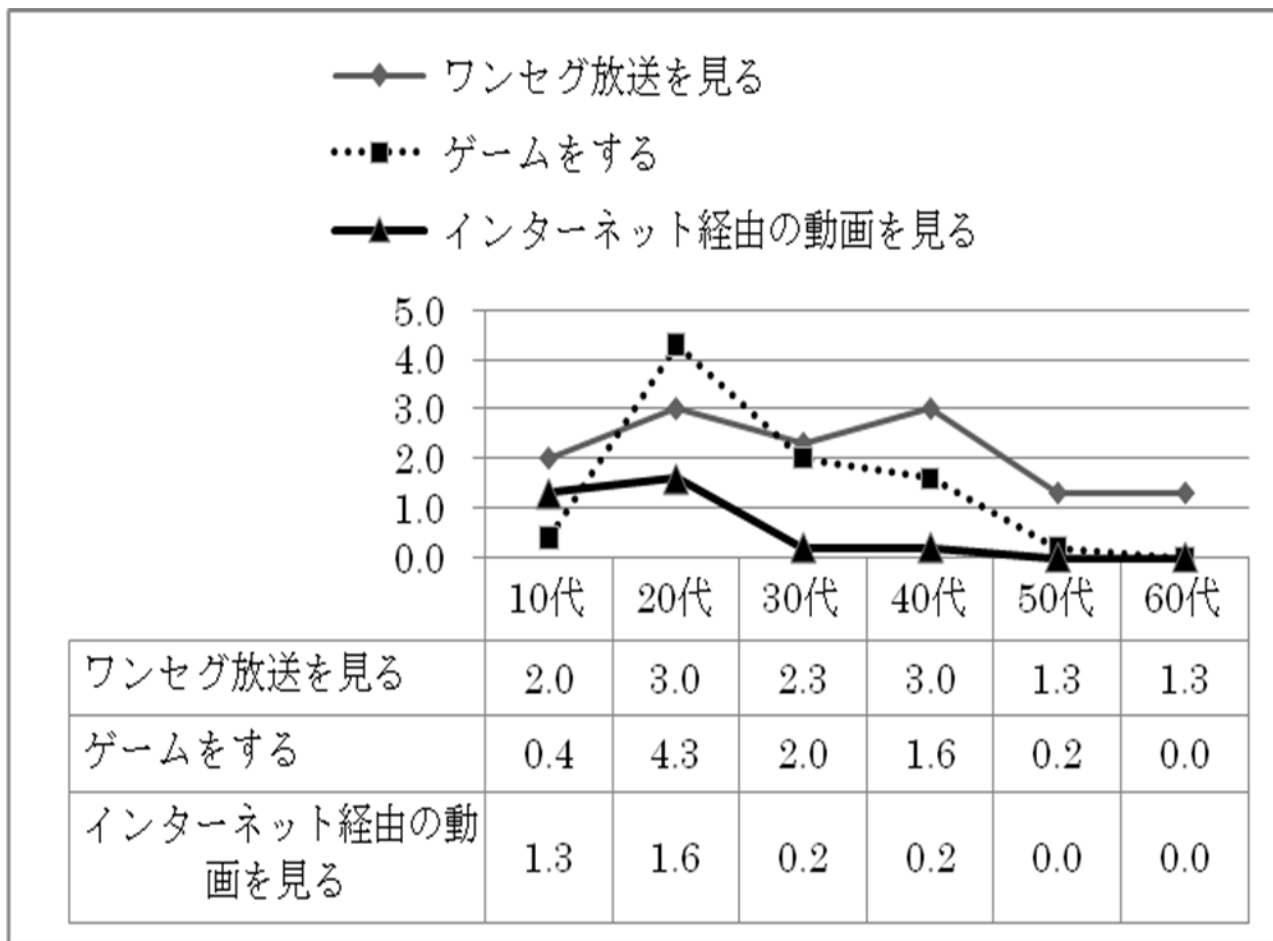
「テレビ」と「PCネット動画」は、ほぼまったく無相関

「サイトに書き込む」に至っては、テレビ視聴時間と正の相関

テレビ視聴時間との相関(15-29才)					
		相関係数	有意水準	有意水準表	N
パソコン	ネット動画	-0.05887	0.1827	n.s.	514
	メールの読み書き	-0.04652	0.2925	n.s.	514
	サイトを見る	-0.08369	0.058	n.s.	514
	サイトに書き込む	0.08873	0.0444	*	514
	チャット・メッセージ	-0.09439	0.0324	*	514
	(ネット動画利用者限定)				
	ネット動画	-0.00311	0.984	n.s.	44

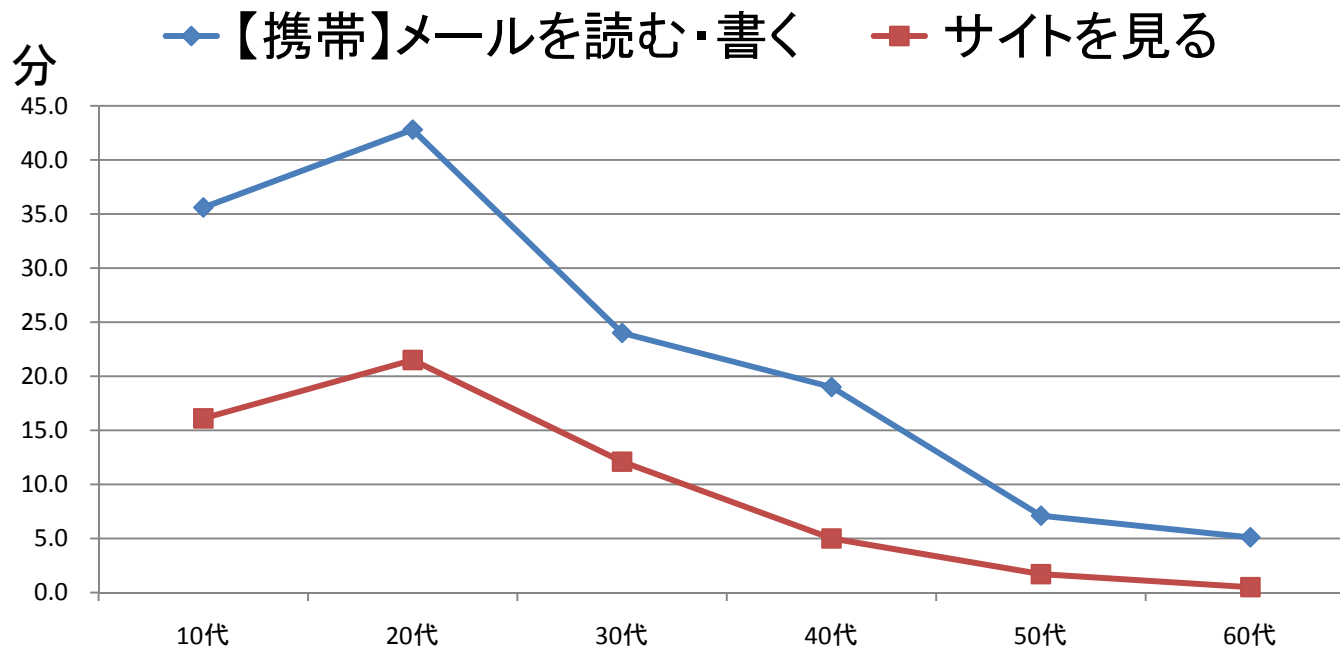
有意水準は「危険率」を表し、数値が低いほど、「有意な関連」と断言しても過ちの可能性が低いことを表す。これが0.9だと、ほぼまったく有意な関連とは言えないことを示す。実際、相関係数は0に近い。

また、携帯での動画視聴がテレビを喰っているわけでもない
 ~テレビ視聴を喰いそうなサービスの利用はごく短時間



携帯画面での画像情報接触時間の年層別比較 (単位:分)

若年層で携帯メール、サイト閲覧時間はかなり長い(下図)、10代20代のそれぞれの時間と、テレビ視聴時間は有意な**正の相関**
 ~携帯をいじっている子ほど、テレビ視聴時間も長い



テレビ視聴時間との相関(15-29才)

メールの読み書き	0.097*
サイトを見る	0.099*

若者のテレビ視聴時間が減少しつつあり、PC
ネットや携帯が主因でないとするれば...他に？

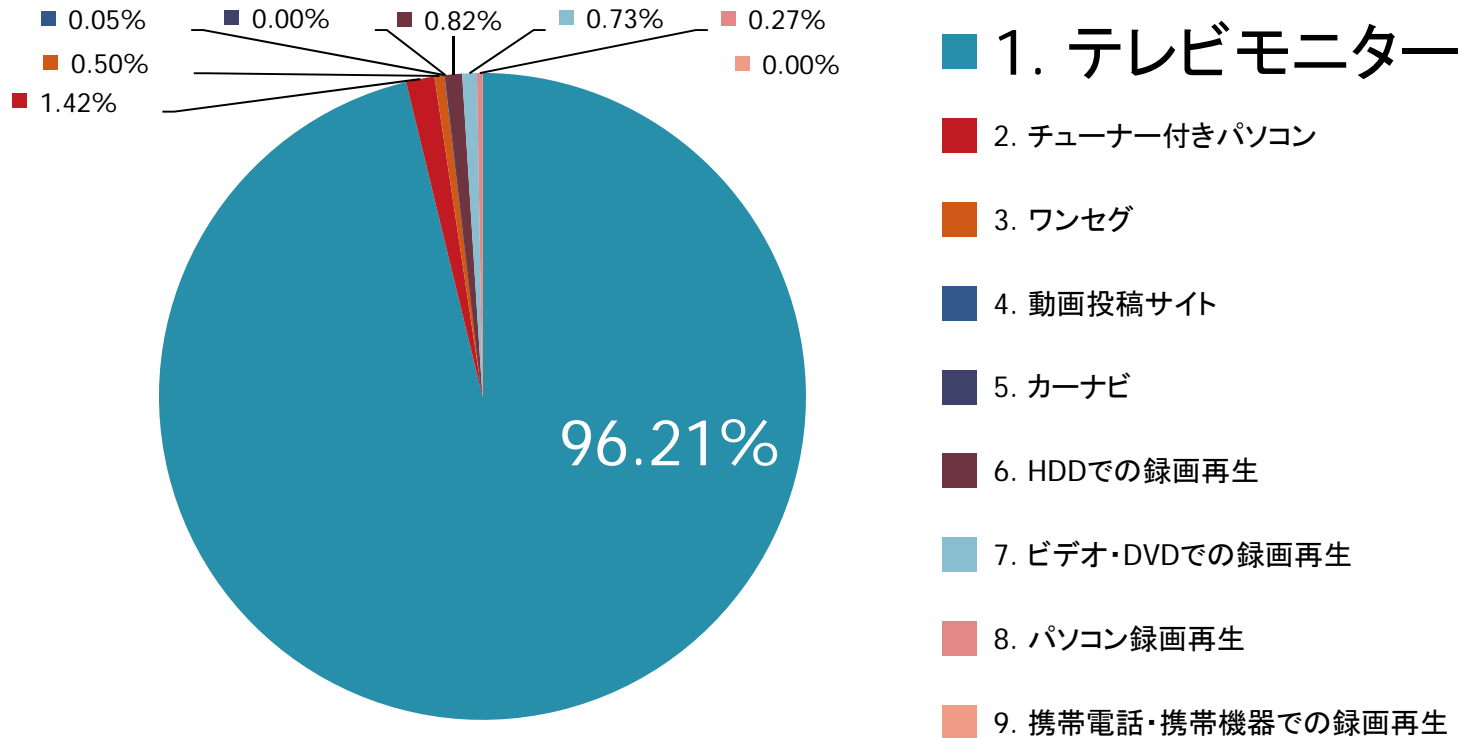
(1) 視聴機器の多様化

～ テレビモニターでの生視聴が減少？

(2) タイムシフト(録画)視聴？

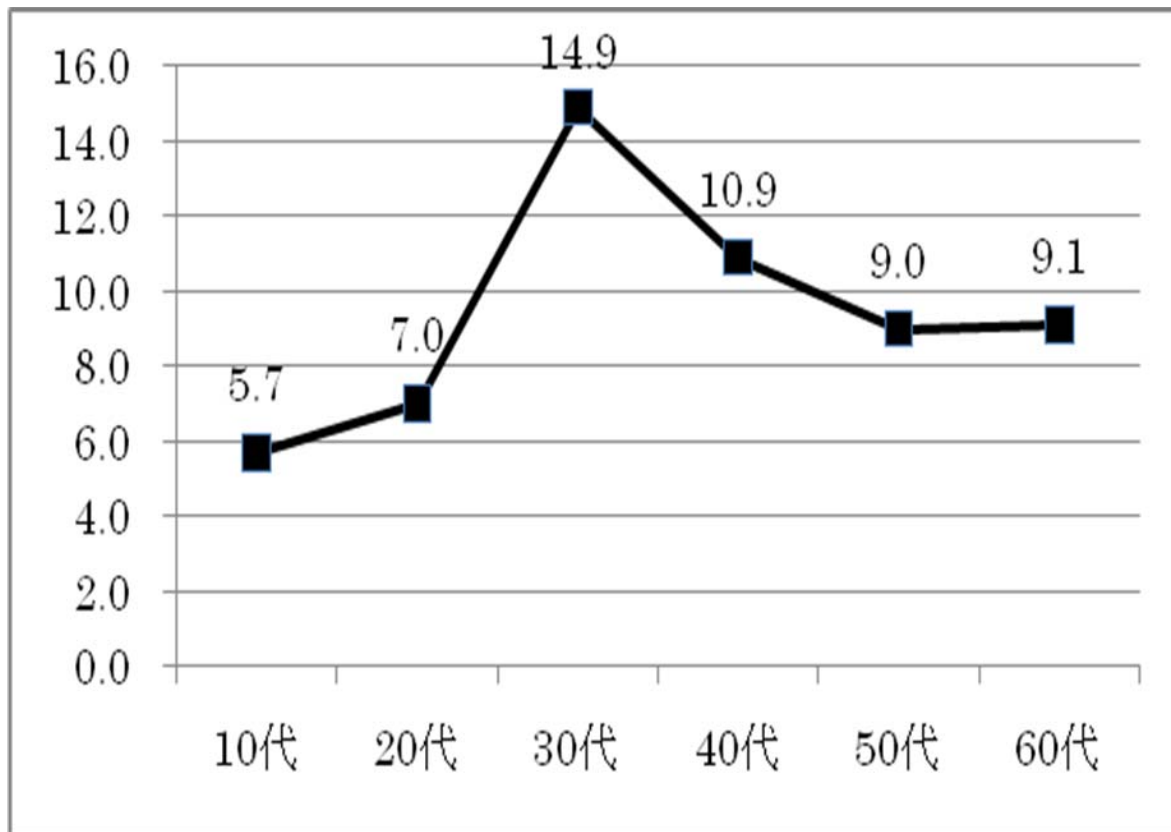
(3) テレビがあきられつつある？

(1) 視聴機器の多様化？ (BPO調査)



依然、テレビモニターが96% ワンセグ、パソコン経由等は微小

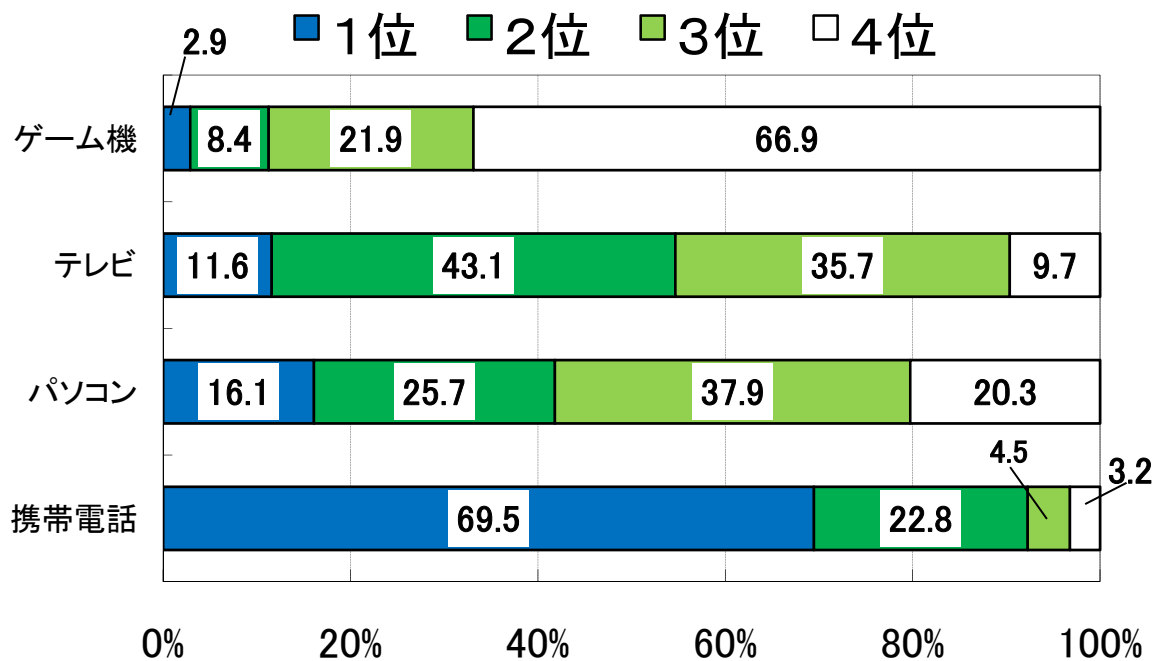
(2) タイムシフト視聴しているわけでもない
←若年層の録画視聴はむしろ短い



年齢別にみた録画テレビ番組の視聴時間(単位:分)

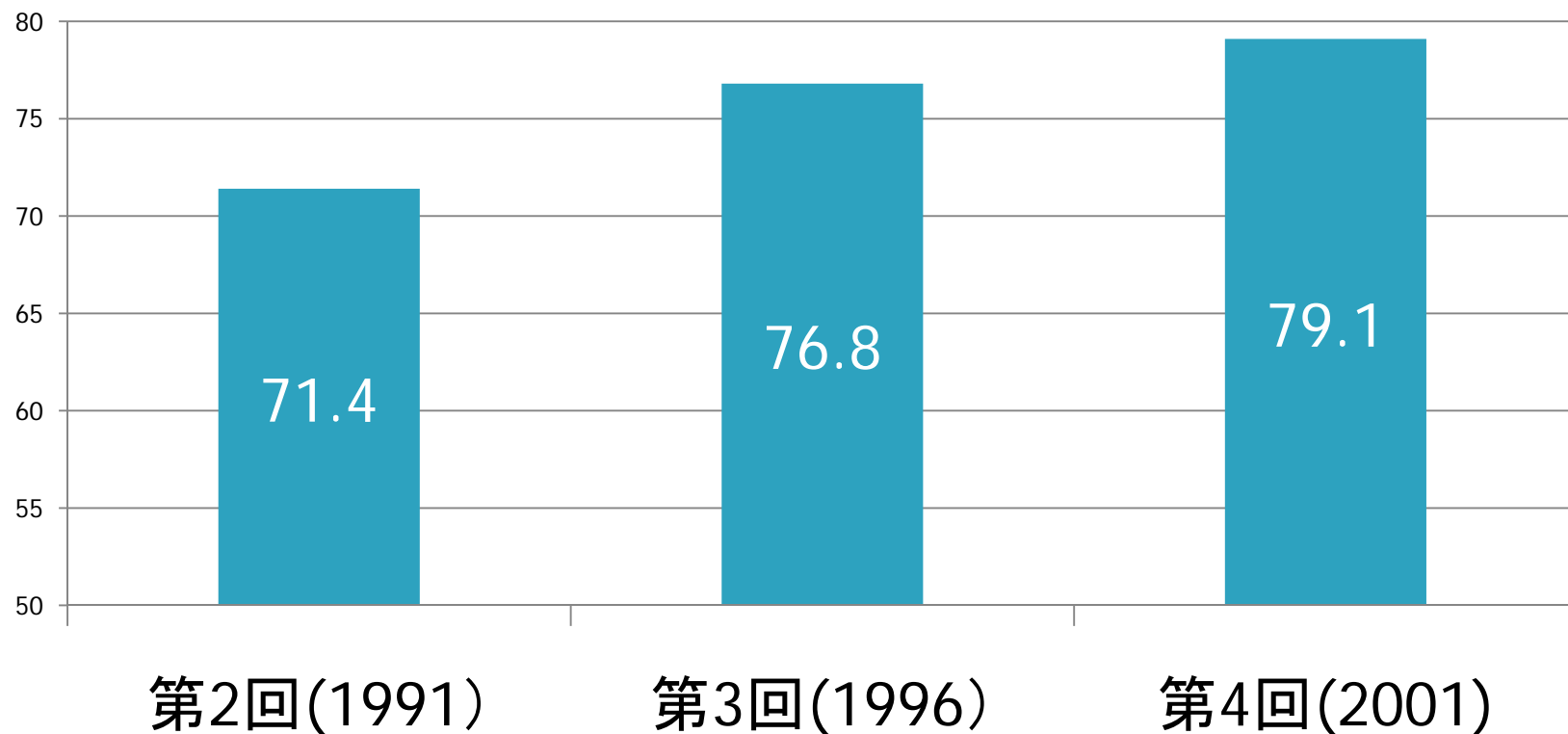
(3) テレビがあきられつつある？ →これは言えそう。

情報メディア中では重要性低下(BPO調査)
「あなたにとって重要なメディア」



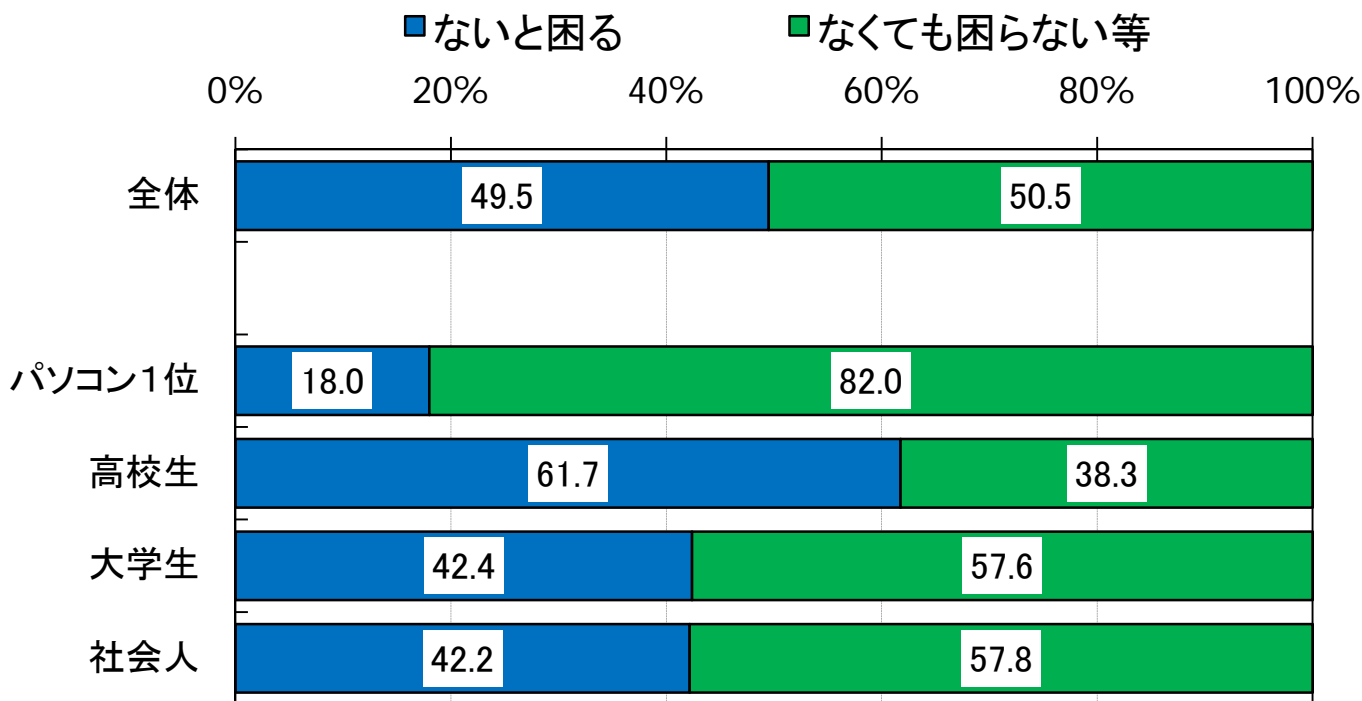
過去は、テレビが圧倒的に「大切なメディア」であった。

「情報化社会と青少年」調査[総務庁→内閣府]（「あなたにとって大切なメディア（3つ選択）」で「テレビ」の比率



Cf.2006年調査では、この質問は削除

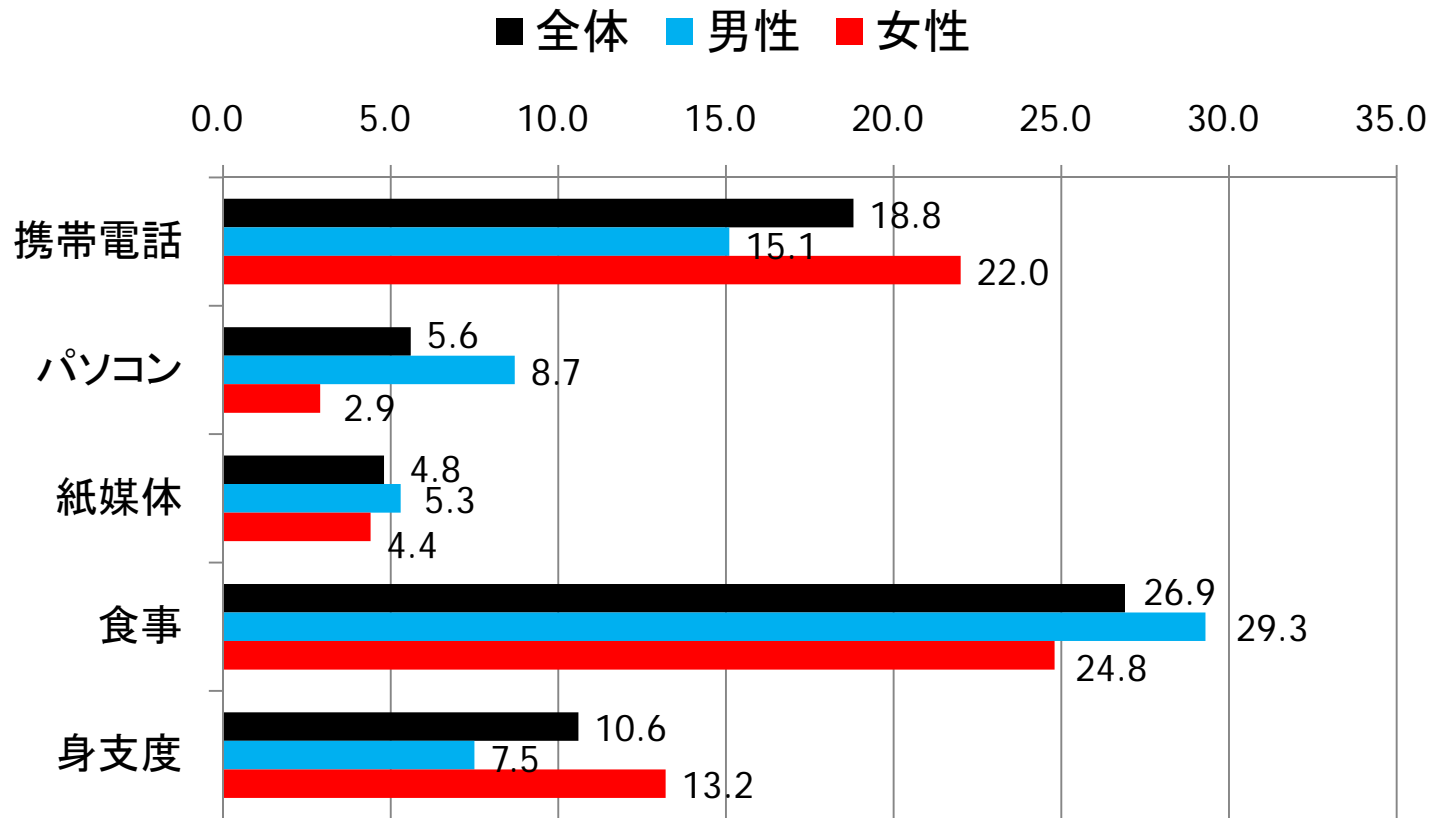
すでに半数は「なくても困らない」 (BPO調査)



○ テレビがなければないでいい、
という人が多くなっている。

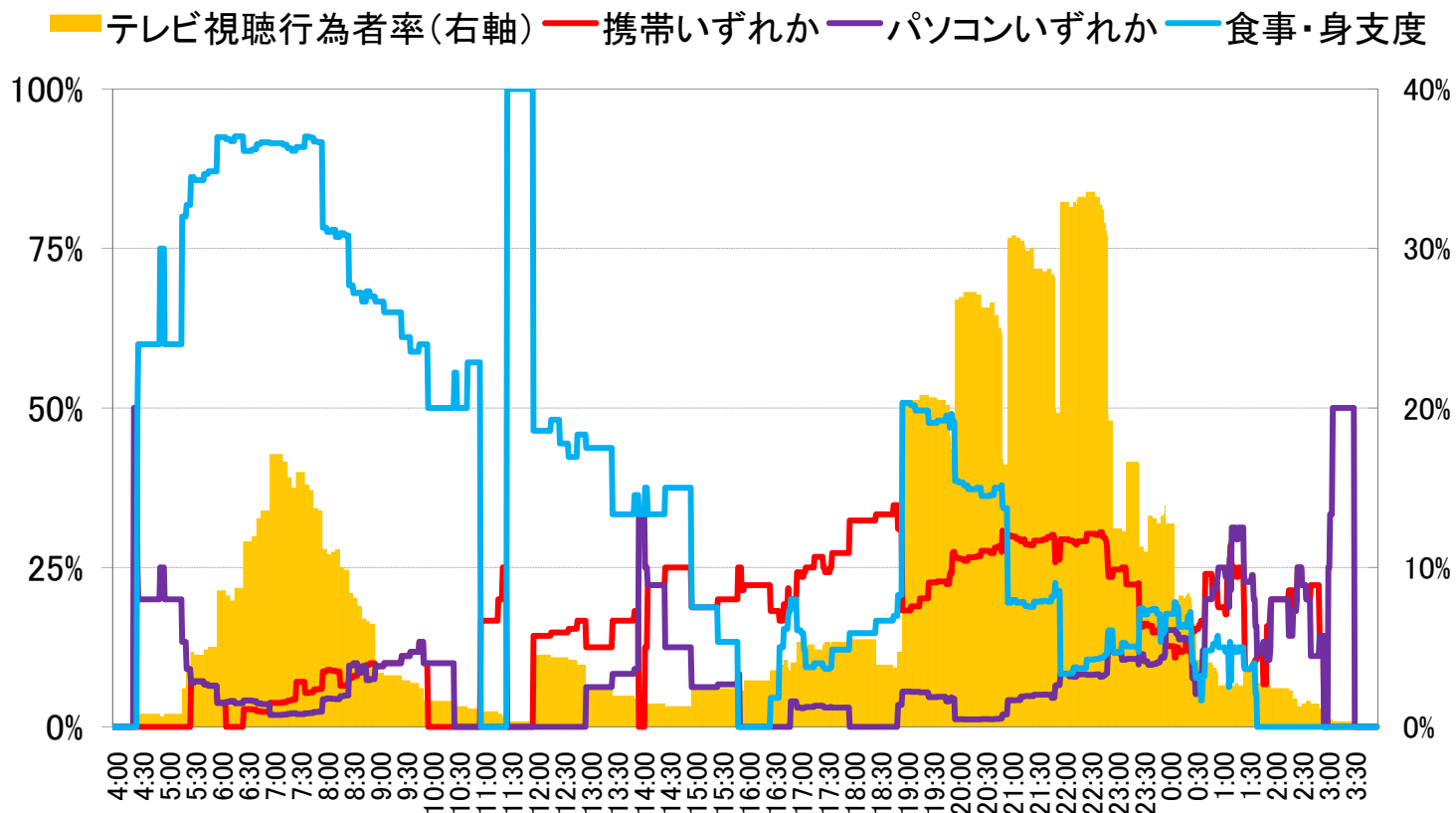
他方、他メディア、とくにケータイとのながら
行動も増加

ながらの実態 (BPO番組表調査)



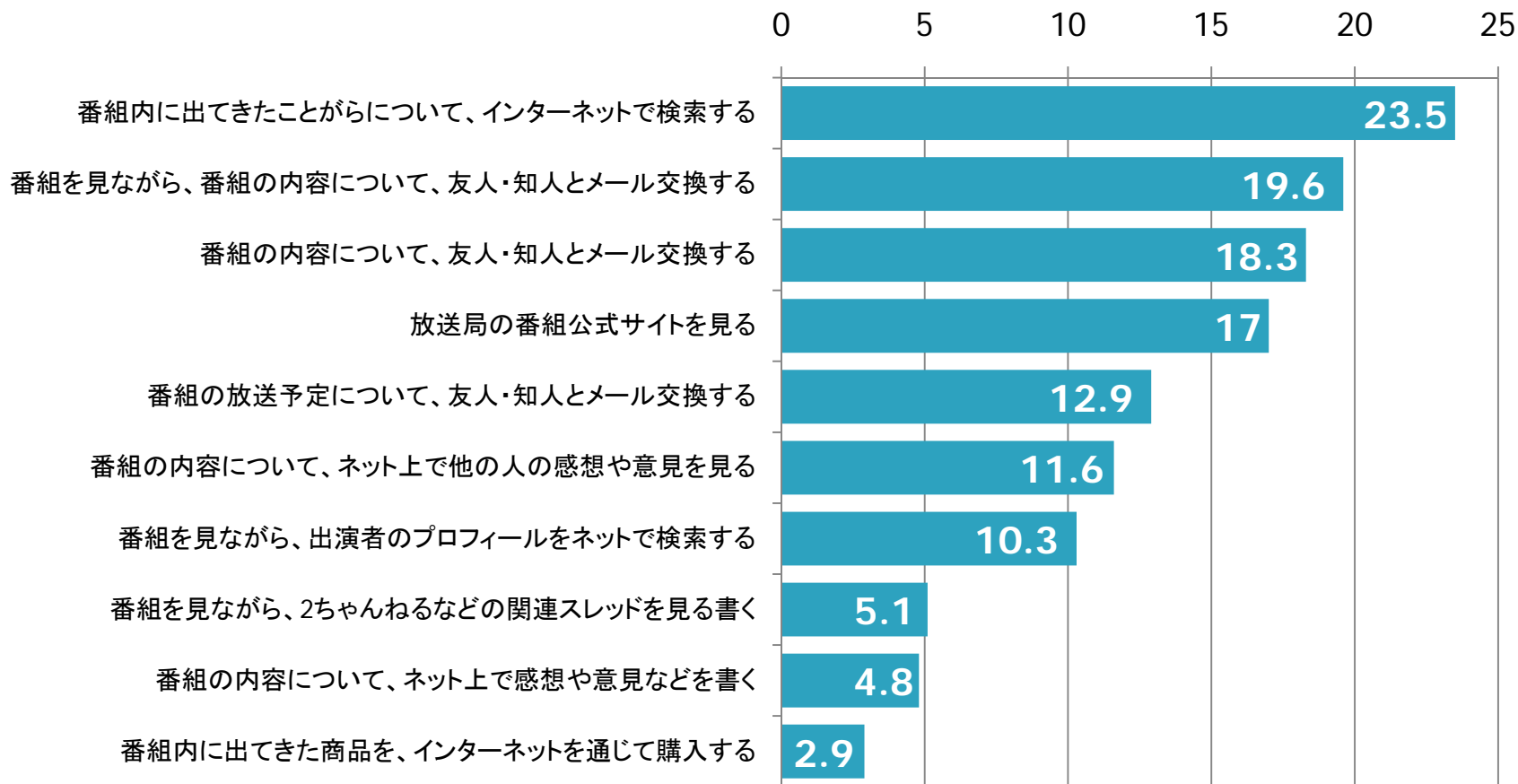
数値は視聴された番組で、それぞれ ながら利用行動があった番組の比率

時刻別テレビ視聴と他の行動 (BPO調査)



平日、午後6時台にはテレビ視聴者の35%が携帯電話(赤線)をいじる

視聴中のネット利用行動も頻繁化 (BPO調査)

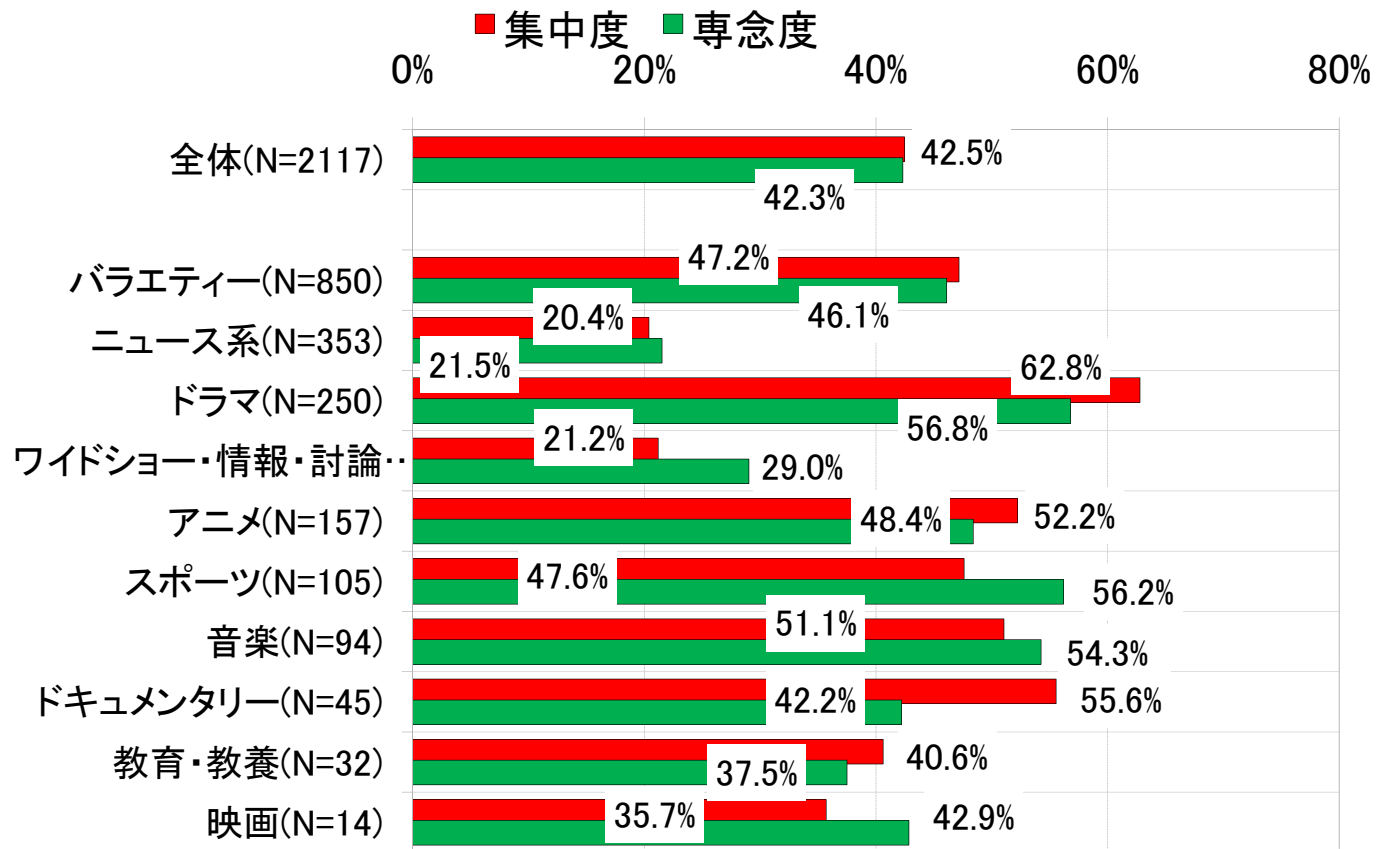


集中度と専念度

集中度 ~ 集中してか、ぼんやり

専念度 ~ 専念か、ながらか

番組の6割は、ぼんやりとながらで視聴



テレビは従来から（NHK調査では）、専念度は50%程度で「ながら」のメディア

しかし、以前のながら行動の相手は、主に食事や身支度。

今のながら相手1位のケータイは、それ自体集中力を必要とする（eg.「メールを書く」等）

→ 実質的にテレビの「ながら・ぼんやり視聴」の度合いは、これまで以上に大きくなっている。→あまり一生懸命見るメディアではなくなっている。見ることにさほどこだわりなし

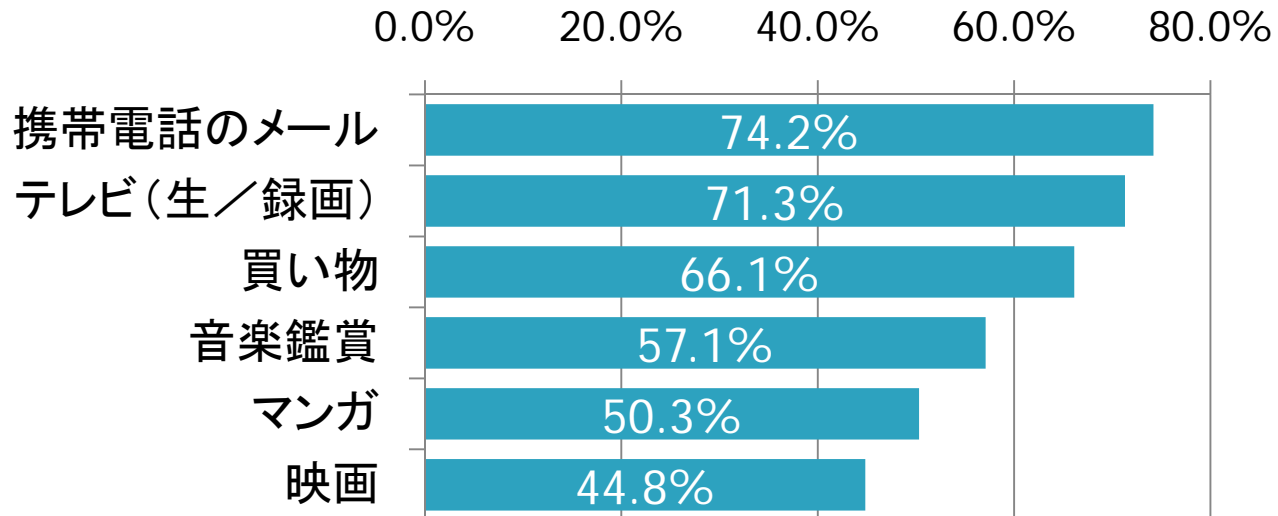
しかし、、依然重要な側面も

- (1) 余暇の時間つぶしとしては依然、重要なメディア
- (2) ニュースの第一情報取得源としての重要性
- (3) 高い効用感
- (4) 高い信頼性

(1) 余暇活動としては重要な位置づけ

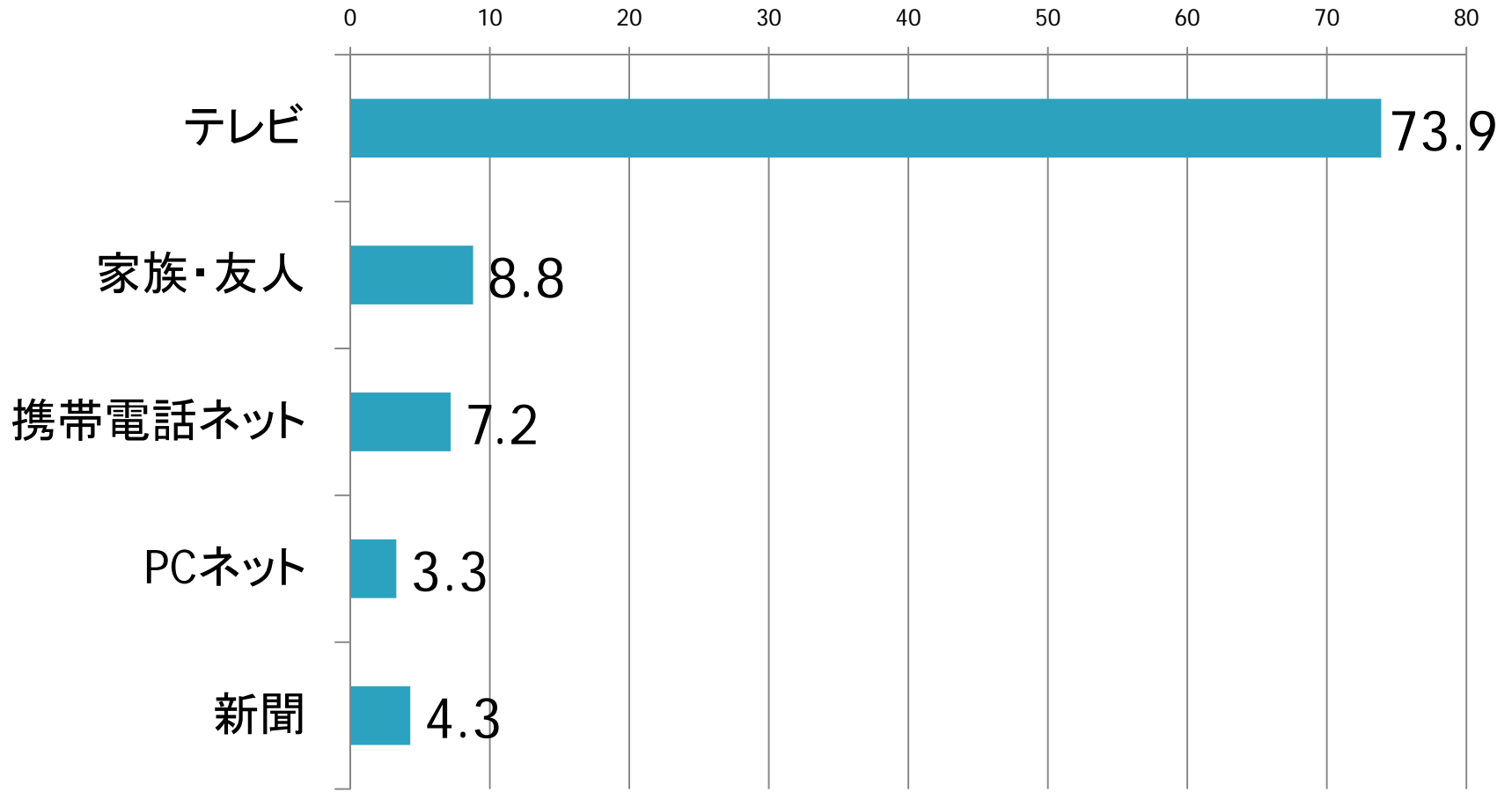
「あなたが余暇を過ごすにあたって重要なことからは？」
(複数回答、選択肢40)(BPO調査)

携帯には劣るが、まだまだ重要な余暇の娯楽源



(2) 第一情報源としての重要性

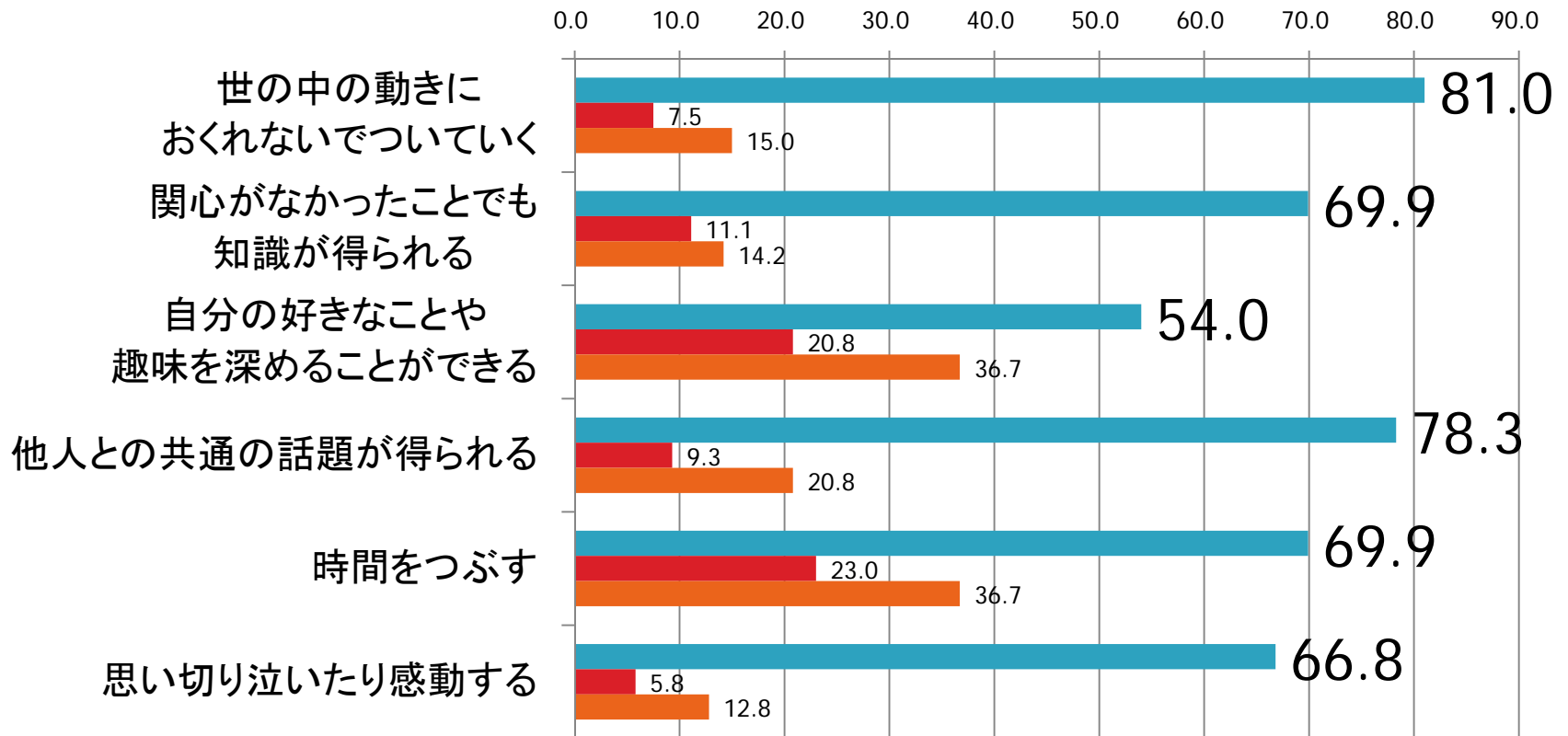
(あなたが「アメリカ大統領オバマ氏に決定」を知った最初のメディアは何か？～BPO調査)



(3) 効用感

(あなたにとって、メディアは次のようなことに役にたっていると思うか?) ~ BPO調査

■ 地上波テレビ ■ 動画配信サイト ■ 動画投稿サイト

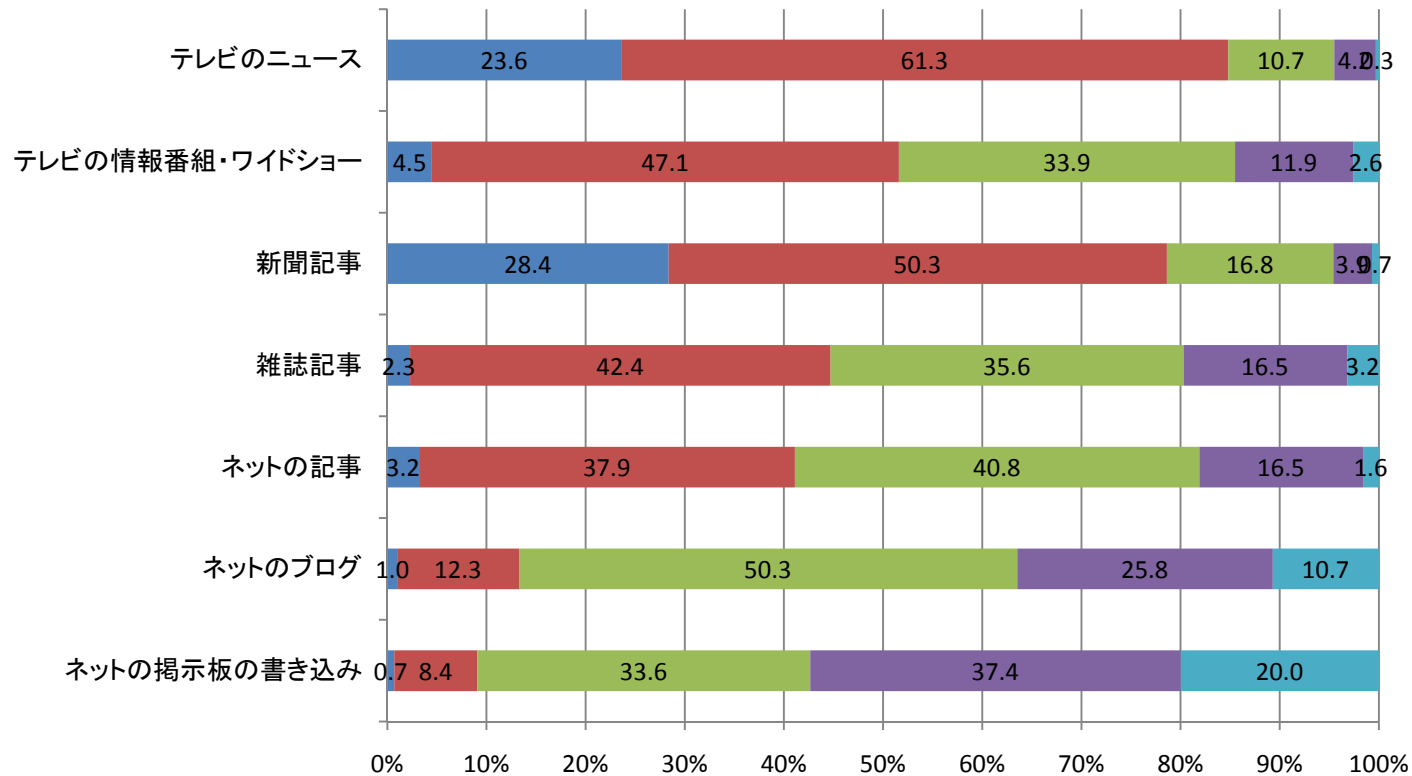


「役に立っている」の回答比率

(4)信頼性～高いテレビへの信頼度

(「あなたは次のメディアをどのくらい信頼しているか？」～BPO調査)

- 非常に信頼
- ある程度信頼
- どちらとも
- あまり信頼せず
- 全く信頼せず



まとめ

- (1)若年層のテレビ離れは進んでいる。
- (2)しかし、ネット利用がテレビ視聴時間を直接的に侵蝕したわけではない。携帯利用が侵蝕しているわけではない。
- (3)在宅時間に応じて、諸メディアへ割く時間は相応の割合である。
- (4)タイムシフト視聴(録画視聴)が進んでいるわけではない。
- (5)しかし、メディアとしての重要度認識が低下している。
- (6)テレビ視聴と他メディアのながら行動も増加
→テレビ番組への興味・関心が低下しており、どうしても見たいという欲求が希薄化。(強いていえばこうした感覚が視聴時間を低下させている)

しかし、

(1)余暇の時間つぶし的手段として

(2)第一情報源として

まだまだ重要、また

(3)効用感、(4)信頼度

も依然高い。

さらに

- ・テレビは他の娯楽ソフトの重要な提供源である。(アクセスしたネット動画投稿サイトの中身の4割以上がテレビ番組関連)
 - ・PC、ケータイネットで独自コンテンツは未成熟(とくにニュースの取材力はほとんどない)
- 情報プロバイダー、コンテンツクリエイターとしてのテレビの使命は、これからも依然として重要(か?)